

赤龍帝の幼馴染、始め
ました。

金毘羅米

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

兵藤家の隣に居を構え、母子2人に1匹で暮らす竜巳家。

進級を機に度重なるトラブルの中で自身の秘密が暴かれて行く

悪魔、天使、墮天使の勢力の中で彼が選ぶ道とは…

特に先も考えてない実験作！

イツセーの不遇はどこまで極まるか…

目次

ええ……つと旧校舎？のディアボロス？	
グレモリー？……ダメだ思い出せない	
母子家庭	1
彼女とか羨ましくないから、いやマジ	
で	7
主人公補正とは……	30
4. 金髪シスターと○○を食べよう	
47	
5. 紅だあああああああー!!!	
60	

えええ……つと旧校舎？のディアボロス？グレモリー？
……ダメだ思い出せない

母子家庭

「にやあく」

早朝の7時になると俺を起ここそうと愛猫が鳴く……これが毎日の出来事だ。

「うっ……五分………」

そして俺は朝が得意ではないのでなかなか寝具から出られず、通じる筈のない言葉を
飼ひ猫……黒華くろがにかける。

「駄目よ。朝ごはんできたから起きなさい」

そしていつの間にか部屋に入つて来たか……母さんの声が起床の催促をする……これが
もう一つの日課。

「……無理……five……minutes………」

「英語に変えても駄目よ」

「にやあく！」

「痛い……つ。引つ搔かないで……え………ZZZZ」

「こら寝ない」

母さんが終に「布団を剥ぐ」の攻撃をして来た。無防備な俺にはこうかばつぐんだ。

「ピカ………ピ………」

「瀕死つて言うのはね。まだ動けるつて事なのよ……時人……ときひと……キツイの喰らわせるわよ？」

「起きます！起きますとも！」

俺はバツチリ目を開けると目の前にはたわわに実つ……ゲボゲボツ……拳を血管千切れんじや無いかつてくらい握り込んで笑顔を浮かべている母さんがいた。(肩には黒華)

(あぶねえ……あと少しグズつてたら死んでたわコレ)

いや、死ぬつて大袈裟だろと思つた諸君、あまり母さんの拳を舐めない方がいい。『その拳速、ケンシ○ウの如し。その拳力、ラ○ウの如し。』と謳われている立派な北斗○拳の継承者の母の手かかれば俺は一発で病院送りだ。実際中3の時、受験当日の朝に同じ理由で死にかけた。

「誰が北斗○拳の継承者よ。ただ、貴方がこれ以上グズつてたいたらジ○ギの如く捻り潰していたわね」

「母さん北〇の拳知ってんだ」

「知ってるわよ。あなた『まるで成長していない……』わね」

「それ安〇先生のセリフね。別作品だから」

「そうだったかしら？あ、『お前は鰥だ。泥にまみれるよ』の方だったかしら？」

「それも違うから。それもスラム☆ダ〇クだから」

「☆なんてあつたかしら？ダイ〇モンド☆ユカイと間違えてない？」

「ダイヤ〇ンド☆ユカイは☆じゃねーよ。六芒星だ」

「……とく間違えてんな母さん……」

「六芒星って変換できないわよね」

「……裏事情……」

「てか、もう時間ヤバイね」

「まだあわてるような時間じゃないわ」

「だからそれスラ〇ダंक」

結果：母はスラム〇ンクが好き

「遅いよ時人……」

リビングに降り立った私の漆黒の眼には真つ先に幼馴染の姿が映った。

「おう、おはようISSSEI」

こいつはISSSEI。駒王スクール、エロ担当のISSSEI・HYODOだ

「俺はつつこまない。つつこまないからな！」

「あ？何ブツブツ言ってるの？バイクで引きづり回すぞ？」

「理不尽か！てかお前はバイク持ってないだろ！」

「うるせーよ。何しに来たんだよ。帰れよ」

「今日あたり強くない!？」

正直なところ一誠は家に招きたくない。

なぜなら……

「あーやだ、一誠君待たせてるの忘れてたわ。ごめんなさいね？」

「い、いえ／＼何時間でも待ちます！」

「……………」

母さんをエロい目で見やがるからだ……

「にやあ!!」

黒華は俺の意思を代弁するように一誠の顔を飛びかかりその顔を掻き荒らした。

「イタイイタイ!!」

「ここに来る途中でカドミウムでも摂取したのか？あと黒華、ナイス」
「にやつ！」

「いや、そう言うのではないから。それ俺お隣さん、途中とか無い。あと全然ナイスじゃない！」

「なんだよ。ウチの猫ちゃんに文句付けようってか？それとツツコミ多い」

「シャーー!!」

「ぶぶつ。滅茶苦茶嫌われてんな」

「て、てめえ……………」

「あーハラ減ったー。母さん、飯」

「自由か」

「じゃあ、行つてきます。おらイツセー、さっさと歩け！」

取り敢えずイツセーの脛を蹴った。

「痛い！」

「安心しろ……………峰打ちだ……」

「お前峰打ちがどう言うものか知らないだろ……」

イツセーよ……そんな哀れむ目で見えるな……殴りたくなっちゃうゾ！

「はい、気を付けて行ってらっしゃい」

「はい！兵藤一誠！今日も勉強に全身全霊！努めたいと思います！」

「ウゼエ、ウルセエ、成瀬エ」

「成瀬つて誰だよ……」

「貴方達、もう直ぐ昼よ………」

母よ……そんな哀れむ目で見えるな……殴りたくなっちゃう……

「ぐはあ!!!」

「と、時人オオオオ!!!」

な、殴りやがった!!腹に！痛い！ヤバイ！バカほど血反吐出た！

「早く行きなさい……（? ? ?）」

「ひっ……い、イツセー！さっさと行くぞ！誰のせいで遅れたと思ってる！」

「お前の所為だよ！」

彼女とか羨ましくないから、いやマジで

「急げイツセー。もつと早くこげ!!」

うん、良い風だ。こんな日は古傷が疼くな……傷なんて無いけど。

「おう!!……………つて」

「なんで俺がこいでるんだー!!」

俺は温室育ちの坊ちゃんなので自転車に乗れないという自分ルールを課しているの
でイツセーに漕がせて自身は後ろに乗っている。

「弱○ペダル!!」

「読んだことねーだろ!死ね!」

「小学生並みの暴言だな」

「代われ!」

「嫌だね。ほら、後でエロ本買ってやるからさ、死ぬ気でペダル回せ」

「絶対、絶対だかん!!」

イツセーはエロ本への情熱を目を血走らせ息を荒げる事で表現して俺を見る。つま
り気持ち悪いって事だ。

「うわあ…あんな物の何が良いんだか…」

「はい！セーフ!!」

俺達の教室への駆け込み様はまさにアレだな……まあ、特にないんだけど

「いや、完全にアウトだから遅刻だから」

担任をはじめクラスメイトの殆どが俺達を白い目で見ていらっしやった。まあ、遅刻したのは事実だからコレだけは言っておかないとな……

「うるせえモブ教師！尻にチヨーク詰め込むぞ！」

「違うだろ!! 『すいません』だろ！」

「すいませんモブ島先生、あれ？モブ崎でしたっけ？モブ田？モブ森？モブ野？モブ井？モブ橋？」

「いや、モブから離れろ……」

「うわあああああんんんん」

はぐれモブは逃げ出した。

「あーあ！泣かせちゃったな、イツセー！」

「お前だよ！」

「人のせいにしちゃ駄目だって親に教わらなかったのか？」

「言いたい放題か！俺のセリフだわ！」

「あーハラ減ったー。もう昼だぜ？」

朝飯以来何も食ってないからな。腹ペコだ。

「お前の朝飯は昼飯って言うんだよ、時人」

解せぬ……

まあ時間は正午なので昼休みは自ずとやって来た。俺はイツセーを殴り倒して購買へ駆け込んだ。

「理不尽……もう極まってるよな？」

「イツセー……購買つてのは戦場なんだよ！戦場に理不尽なんて無いんだよ！『勝てば官軍』だ。甘つたれた事いってんじやねえ！」

取り敢えずもう二発殴ろうと思つたが、俺もそんなに最低な暴君というわけでは無い。鳩尾みぞおちに一発で勘弁してやった。

「うぐつ……やつぱり今日厳しい……」

「さて、屋上に行くぞ。八〇風に言うならベストプレイスだ」

「別に〇幡風にいう必要ないだろ」

俺は俺ガ〇ルをリスペクトしてるからな。新巻でないのかなあ……

「ああ、メグリツシユされてえ……」

ハモった。怒った。殴った。

屋上に舞い降りし我を待ち受けていたのはイッセーの同僚のMATSUとHAMADAだった。

この学園内でISSEI、MATSU、HAMADAの3人は総称で『HENTAI HENTASY・III』と呼ばれている。『FINAL FRONTASY・III』みたいな感じで呼んでくれ。

「おう！待ってたぞイッセー、トキ」

MATSUが俺達に向かって手を振って来た。俺達はMATSUとHAMADAの所へ行き、一言

「トキはやめろ。北〇の拳の件はもう朝やったんだよ」

トキはいい人だからな。俺がトキと呼ばれるなんて烏滸おこがましすぎる。トキ先輩の前には八〇先輩も霞かすむレベル。

「なんだよ。つまんねーな」

「イツセー? どうした? 大丈夫か?」

元浜は俺が引きずつているイツセーの顔をペチペチ叩きながら生存確認を取っている。だが返事がないな。ただの屍だ。

「安心しろ飯食わせれば治る」

1. まずはイツセーを仰向けにして寝かせる。

2. 気道確保。

3. 購買で買ったメロンパンをイツセーの口に詰める。

メロンパン食べたかったが仕方がない。俺はザラキ使った以上はザオラルまでしっかりと責任持つタイプだ。

4. 最後に水分を摂るために、飲むタイプのヨーグルト（結構ドロドロのやつ）を鼻からブチ込む。

良い子が真似したらまあ間違いない殺人ものだがイツセーなら大丈夫だ。

「お、おい! 大丈夫か、これ!」

元浜がテンパる。松田は妙に落ち着いている

「……………来るぞ！」

「……………ゲホオオツ!!ウエツ!!ゴホツ!!」

一誠が大きく咳き込む……

「鼻からメロンパン、口からヨーグルトが出て来ている……………成功だ！」

「いやどういふ事ー!?!」

「さすがイツセー!復活したてにも関わらずこのツツコミ。松田君、元浜君。手術は無事成功しましたよ……………」

「ありがとうございます、先生!!」

「いえいえ、これからは友達を大切にしなさいよ。また殴ったり、蹴ったりするのは以ての外ですよ。元浜君?」

「え……………」

「責任転嫁しやがったああああ!!!」

イツセー煩いぞ。

さて、イツセーが復活したから漸く昼飯にありつける。俺は座って買ったものを並べる。

「あ、相変わらずとんでもない量だな…」

イツセー達の目の前に並べられた今日の俺のお昼メニューは……チョココルネ5つ、サンドイツチ5つ、チョコクロワッサン15個、おにぎり10個…etc……うん。

「普通だろ？寧ろ少ない」

「異常だよ。なんだお前、食没でもするきか？」

「なんだ？俺がト○コってか？なら……」

「釘パンチ!!!」

「痛い……って、いつものパンチじゃねえーか!!」

「うるせえ。飛ばすぞ？食没の岬まで」

「いや、どこだよ……」

少しマニアック過ぎたか……ならこの台詞ならどうだ…

「おめーらの昼食かぶれの常識は、俺には通用しねえ!!」

「昼食かぶれってなんだよ…」

あ？違うわくそこじゃないんだよ。

「はあ……やはり母さんしかついてこれないか……」

「どういことだよ?」

「もういいや。去年まで帰れ」

「まるで意味がわからん」

俺だつてわかんないよ。勢いで喋つてんだから。あと後半から松田と元浜がまるで伝説の超特殊調理食材の様だったね。

あ、エアね。空気だつたつて事…。

………

…取り敢えずこの行き場のない恥ずかしさはイツセーを殴る事でなかった事にしよう。

取り敢えず1秒に1個のペースで全ての食べ物を平らげた後、時間も余るもんだから元浜のメガネを割つて遊んだ。

「時人……改まつてだが……お前鬼だな」

「ハズレだ。正解はヒト科ヒト属ヒトだ」

「そういう事じゃないんだよ！」

「ハラ減ったなあー」

「「お前マジか!!」」

3人口揃えて一字一句違えずにつっこんできた。仲良いなお前ら：あー、どうして学校の飯って腹減るんだろう？うち飯はそれこそ常識的な一人前で腹一杯になるのに……やはり母さんの腕前がなせる技か……明日からお弁当お願いしようかな……ん？

「どうした、時人？」

少しの間黙り込んでいた俺が急に立ち上がるもんだからイツセーが問いかけ、松田と元浜も訝しげな目で俺を見てくる。

「…悪魔が来た………ちよつと行ってくる」

「あーはいはい。行つてこい」

「あーなんだ。いつものやつか」

「僕達は先に教室に戻ってるよ」

イツセー達は「また言ってるよ…」と呆れた目で俺を見てくる。まあそれに以上深く突き詰められても困るんでいいんだが…

目的の場所へと歩を進めていると背後からものすんごい。それはものすんごい煌めきを感じたので振り返ってみるとあら不思議、ただの気のせいだった。

「やあ、竜巳くん」

いや、気のせいじゃ無かった……再び正面を向けばいつ現れたのやら、いかにもしつこくてウザいくらいいい人感出しそうなパツキンのイケメンがいた。

「あ……………ども……………」

めんどくせえ。交流ねえ。誰か知らねえ

てかなんで俺の名前知ってんだよ。

「ええつと……………」

何だこいつ…自分から話しかけておいて他に何も無いのかよ……………てか誰だよ。

「なんだよ。サツサと要件言ってくれこれから大切な用事があるんだから」

マジでそろそろ我慢の限界。

「そうだね、ごめんね。その件で話があるんだけど少しだけ時間あるかな？」

その件……だと……!?こ、こいつまさか……

「聞いていたのか……」

イケメンは黙り込む。本当にそういうのやめて欲しい。こっちには時間がないんだよ。

「ああ……君は……こちら側の者なのかい？」

漸く口を開けた目の前のイケメンは笑顔でされどその奥に警戒心を潜めながら尋ねてきた。

「こちらこそこちらもない……誰もが等しく立ち向かわなければならぬ……そう言うものだと俺は思うぞ？」

フツ……決まった……

「……（何だか話が噛み合っていないような……）成る程……僕には無い考えだね」

あ？こんな事に考え方とか無いだろ。本当にこいつ誰だよ？こんだけ話し込んだら今更聞けねーよ……

「（はあ……めんどくせ……）そろそろいいか？午後の授業までには済ませたいんだ」

「（どうしよう……部長に報告するべきか……いや、実際に悪魔と接触した現場を抑える……

よし……っ）……僕も同席しても構わないかな？」

「!!?.....お前.....本気か...?」

同席つてそう言う事.....だよな.....? いや、同席つてなんだ? 見るつてことか?

「ああ.....決して邪魔はしない事を誓うよ」

ふむイケメンの決意は固いようだ。だがな、イケメン。今日の俺はお前のその決意に反して緩い。シャビシャビの可能性だつてある。だから.....

「.....悪いな。俺一人で行くよ」

そう言うものだしな。

俺がそう言うといケメンは失望した顔をする。だがそれも一瞬で直ぐにイケメンスマイルに戻して一言。

「ううん。僕の方こそ突然ごめんね」

「おう。じゃあな」

俺はイケメンに背を向け目的の場所へと移動を再開した。

「はあ.....危なかった...」

便意悪魔は誰にでもやって来るものだからな。だが漏らす寸前まで追い詰められたのも久

方振りだ…あのイケメンの邪魔さえ無ければ…

「だが、見たいって…ヤベー奴だな」

同席ってどうやってするんだろ…想像する気もないし、したくもないが…

「『決して邪魔しない事を誓うよ』…か…邪魔って何だよ。何する気だよ。怖えよ…」
イツセーと話すネタ増えたな…

やっぱり緩かった…

悪魔との死闘を終えた俺はご機嫌スキップランランで教室へと向かう。

「ガラガラガラ〜」

「お帰り。あと無駄なセリフ入れるな」

教室に入ればイツセーの素早いツッコミが入りました。流石我が相棒

「悪魔との戦いから帰ってきた友に労いの言葉一つもなしか…」

「何が悪魔だ。厨二か。便意だろ」

「お前、この世界で悪魔の存在を否定するつてのが相当クレイジーってな事って気付い

てるか？」

「こいつには少し言っておかないとダメだな

「おい……裏事情だろ……」

「はあ？何言ってるのお前は？いいか鼻の穴ガバガバにしてよく聞け、ウイツセー」

「耳な。かつぼじってな。あとイツセーな」

「ちよつと何言ってるか分かんないからよく聞け」

「何で分からないだよ。あとマジでこれ以上言うな原作壊す気か。もう壊れてっけど」

……準備は整った。行くぞイツセー!!

「いいか、イツセー……お前の言ってる事はな……デー○ン閣下の顔面に唾かける行為に等しい事なんだよ!!!」

デー○ン閣下……数十年という長い間、自らの悪魔設定をブレずに保ち続けている。俺たちの大先輩だ。

「……………は？」

イツセーなに固まっている。だがお前が辛い思いをするのは……コレカラダ。

「なに？お前テレビとか見ない派？ならゴメンね……て、言いますか…君、今…裏事情？

…原作？とか言っちゃいましたけど……何のことですか？」

イツセーが顔が歪んでいく。

「あと……原作壊れる……？でしたっけ？え、自分が物語の主人公か何かと勘違いしてるんすか？こんなしがない男子高校生達の日常をファンタジーか何かと勘違いしてんの？」

イツセーの肩が震え始める。

「いや、分かるよ。男の子って自分が特殊能力に目覚めるとか勘違いしちゃう時期ってあるよね。俺にもあったよ……念じればいつでもホームランバーが手元に出て来るって思ってた。右手にホームランバー、左手にはあずきバーね」

「イツセーもそうだったんだよな？あ、ごめん……今もだったな。『トゥルーマン・ショー』
感覚なだけだもんね？」

イツセーが俺に背を向ける。

「おい。イツセー？お前は人間だ。何も無い。特殊能力も主人公補正もハーレムもだ。日本だ。一夫一妻制だ。重婚は罪だ。そんな事考えてっから女子から白い目で見られるんだよ」

一誠が項垂れる。

「もう疲れちゃったよね？なら帰るか？ついでだが、午後の授業は体育だ」

「おいマジか！行くぞ時人！」

「オラアア!!」

「グハアツ!!なんで……殴った……」

「下げて上げて殴るのが俺流だ」

結局女子更衣室へと駆け出したイツセーは松田、元浜と揃って生徒会のお縄についた。そして俺はそれを見届けてから帰宅しました。お腹減った……

「ただいま」

「にゃ〜ん!!」

俺が玄関扉を開けてそう言うといち早く黒華が駆け寄って来た。愛い奴じゃ。よし、一緒にイツセー殴ろうな〜?

……あれ?

「黒華……母さんは?」

何時もなら黒華に少し遅れて出迎えてくれる母が来ないので不思議に思った。

「にゃ……」

黒華は『ついて来い』と目で訴えてくるのでそれに従い導かれるよう黒華の後を歩く。着いた先はリビングの前、俺がドアを開けて中に入るとそこには……

「……何してんの？」

目の前には大量のブロツコリーを並べている母さんがいた。

「あら、お帰りなさい。早かったわね。それと…現状は…見ての通り内職中よ」

「母さん間違いないく騙されてんぞ。誰に得があるんだよ」

「これは本番前のイメトレよ」

もう嫌な予感しかしない。

「……………ついでにその内職の内容は？」

ロクでもない内緒である事は間違いないが、気になる。

「こう…駅前の自転車のサドルを抜いてブロツコリーを代わりに刺して、抜いたサドルをダンボールに詰めて出荷するって感じね」

oh……

「それマジでヤメロ。それ違うから抜いたサドル何勝手に出荷しちゃってんの？」

「ブロツコリー代行業者よ。サドルはメインじゃいわよ？」

「そう言う事じゃねーんだよ。バカか？」

「親に向かつてバカは無いんじゃないかしらあつ!!」

やけに語尾が強いなと思ったら同時に拳も飛んで来た。当たった。痛い。

「はあ……冗談よ。本当はブロツコリーを均等に束ねて出荷する仕事よ」

俺の殴られた意味は……………

「時人の気配がしたから少し揶揄っただけよ」

気配って…あんた何者だよ。まあ殴られたのは母さんが変な事件に関わってなかったの無かったことにしてやろう。やり返しても更にボコボコにされるし…

「うちの収入源って内職だったんだな…内職ってそんなに稼げないでしょ?」

調べた事あるがよく働いて稼ぎは2、3万らしいからな。一ヶ月の生活がそれだけで賄えるとは思えない。

「あ、私50個ぐらい掛け持ちしてるから」

「効率悪っ。働きに出ろよ」

「私は内職で100万稼ぐ女よ?」

いや、すげーな!!社畜さん達より稼いでんじやん。後で作業見せてもらおう。見ました。手が速すぎて見えませんでした。お母さんが怖くなりました。

「ねえ時人…学校は?」

内職の件が終わると母さんがふと思いい出したように尋ねて来た。

「昼飯蓄えてきた」

「知識を蓄えなさい」

「しようがないじゃん。勉強しようにもハラが減って仕方がないんだよ。どうなつてんだよ俺の腹は……あ、母さんもか……」

俺と母さんが食べ放題の焼肉屋へ連日通い続けて店を閉店させた事はまだ記憶に新しい。

「……そうね。そろそろ話した方がいいかもね……」

「……なんだよ?」

「私達はね……サ○ヤ人よ」

「……いつ……まともに会話する気ねーな……」

「私はあなたをそんな口の聞き方する子に育てた覚えはないわよ? トキロツト」

「母さん漫画好きだよね」

「母さんじゃないわ。ハハロツトよ」

「……はあ……満足するまで付き合うか……」

「んじやハハロツト。俺達がサ○ヤ人つてどう言う事だよ!?!」

「貴方な言ってるの? 厨二病?」

「ハ、ハ、ハ……」

母親を本気で殴りたいと初めて思った瞬間だった……

「時人おおお!!!」

イツセーが叫びながらウチに駆け込んで来た。

「うるせえええ!!!」

もちろん俺はイツセーを蹴り飛ばした。さっきの母親への怒りも込めて。

「痛い! いや! そんな事より聞いてくれ!」

こいつも大概タフになってきてるな。

「なんだよ?」

「ふははは!!聞きたいか?」

少し調子に乗ってるようなので軽く蹴った。が、イツセーはそんな事より気にならないくらい気分が高揚していた。少しばかり引いたが取り敢えず聞いておく

「さっさと見え。そして帰れ」

「冷たいなあ……まあいいや!!ふふふ……っ。聞いて驚け!!」

そしてイツセーは一拍おいてから先程の1.5倍程の音量で言い放つ。

「俺に……彼女ができた!!!」

お、おお……これはまたまた……

「幾ら払って頼み込んだんだ?」

「違う!それに、夕麻ちゃんから告白してきたんだ!!」

「イツセーくん、お昼寝してたんじゃないかしら？」

母さん容赦ないな。それって…

「夢って言いたいんですか!?!親子揃って俺の扱いが酷い!!」

「なあ?…美人局つもたせか妄想の可能性が高いこの会話をまだ続ける気か?」

「ああ、俺の幸せを夜を明かして話してやるよ!!」

イツセーのやけに高いテンションがいつも通りウザい。

「私は夕食の買い物にいつてくるわね?」

母さんはこれ以上関わるのは時間の無駄と判断したのか…買い物に行くと言う理由を会話から離脱した。

「じゃあ、夜から聞くから取り敢えず帰って飯食って風呂入って9時くらいになったら来てくれ」

流石に今から朝まではキツイ。イツセーを生かしておける自信がない。

「分かった!絶対聞けよな!」

「あ、ああ……」

イツセーがこれでもかかってくらい念を押しに来るのでその気迫にやられて生返事をしてしまった。

「じゃあ9時な!」

そう言つてイツセーはスキップを踏みながら去つて行つた。

さて、家中の戸締りしないとな……

それにしても…仮に…仮に!!本当に仮にイツセーの話が本当だったら…いや、ないな。あいつに彼女がいるなら俺だつているわ。あ?羨ましくねーわ。あえて彼女は作つてないんだよ。母さん、悲しそうな目で見ないでくれ……

side???

その晩、駒王学園のある一室にて……

「部長……」報告が……

部長……そう呼ばれたのは美しい紅髪を持つ女性だ。

「何かしら?」

「2年の竜巳時人と言う人物に心当たりは?」

「ないわね。その子がどうかしたのかしら?」

「その彼の悪魔関係者を疑わせる発言を聞きましたので一応報告を……」

「まさか……私の領地内にそんな者がいたらこの私が気付かないはずがないわ!」

紅髪の女性は語尾を少し強めてそう言う。次は割って入って来た黒髪の女性が進言する。

「部長、木場くんが嘘を言うわけもありませんわ。一応調べて見たら如何ですか？」

「そうね…もし私の領地で勝手をしてるようだったら容赦はしないわ…!!」

ここに大きく勘違いをした一派ができようとしていた……

主人公補正とは……

次の日イツセーにバカほど殴られた。痛いと思つたらそんなに痛くなかつた。力無いな。女の尻ばつか追いかけてるからだ。あ、イツセーの場合は胸か。

「まあ、機嫌直せイツセー。後でエロ本買ってやるから」

「なにっ！……いや、ダメだ！俺には夕麻ちゃんつて彼女がいるんだ……！」

おお、見違えたな。人は彼女が出来るとここまで変わるとは……これはまさかイツセーの言つてた事はマジなのか？

「イツセーくん。まだ言つてるの？」

母さんが朝食を運んでくるついでに俺にイツセーに聞こえないよう囁き声で聞いてくる。

「いや、エロ本を拒絶したイツセーを見てしまうと一概に嘘とは言えないな」

イツセーのエロ本への並々ならない情熱はイツセー以外でなら俺が一番良く知ってるつもりだ。あいつの12歳の誕生日にダンボール3箱分のエロ本をプレゼントした時は泣いて喜び、俺は母さんの手によって死にかけた。

あの時は大変だったなあ……河原へ行つては拾い、公園の倉庫に行つては拾い。ああ、紙芝居のおじさんから貰つたのもあつたなあ……おじさんから貰つたエロ本だけ、やけに臭うなどあの頃は不思議だったけど、そう言う事だったんだね。

「私は時人が悪い道に行かないよう殴つただけよ。愛ある行為だわ」

「俺が肉塊になるまで殴つたのを忘れたとは言わせないよ？」

「あの頃から時人の性格はオラオラ系に……シクシク……」

母さんの演技があまりにあざとかつた。自分の年齢分かつてんのか？と考えそうになったがこれ以上考えるとまた肉塊になりそうなのでやめた。

「まあいいや。イツセー学校行くぞ」

今日も昼登校でした。

もちろん昼飯食つて帰つた。

……母さんに（物理的）説教された。

今日は10時に自然と目が醒める。つまり休日、日曜日だ。うちの猫ちゃんも賢いので休日は俺を起こさそうとはせず布団の中で丸まっている。愛い奴じゃ。黒華が人なら間違いない良妻だ。

「あ……そう言えば今日はイツセーが……」

今日はイツセーが天野夕麻とやらとデートをするらしい。昨日嫌という程自慢されたのが頭に残っていた。写真まで見せてきて……まあ確かに美人だった。今頃イツセーは待ち合わせ場所でソワソワしているだろう。

「まあ……俺には関係……ない……」

そう、俺には全く関係のない事だ。イツセーが朝チユンしようとしなかつたら一発殴れば気がすむ。これは決して羨ましくて苛立ちを覚えたとかではない、うん。

と言う事で俺は再び微睡みに落ちていった……

「落ちるな。起きなさい」

母に叩き起こされた。仕方がないので寝ている黒華を抱えてリビングへベタベタと歩いて行く。

「よいしょ……つと……」

ソファにもたれ掛かって黒華を膝に置く。特にやる事も無いので近くにある黒華専

用ブラシを取って愛猫の毛並みを寝ぼけながら整える。

「高校生とは思えない生活ね。お母さんはもつとキャピキャピして欲しかったわ…」

母さんが呆れた顔で俺を見てそう言った。それに少しムツとなつて言い返す。

「これが普通だよ。昨日イツセーにも言ったよ。主人公じゃ無いからな、補正がないんだよ。忙しい日常なんて来ないし望んでも無い。これが男子高校生だよ。昼まで寝て意味のない時間を過ごす。その内そこそこの大学に行つてそこそこの職に就く。そこそこの女性と付き合つて結婚して子供が出来てそこそこの生活、そこそこの老後だ。それが実際に出来るかも怪しい。まあ大学までは上手くいってもその後就職に失敗してフリーターつて可能性だってある。嗚呼…なりたくないよ、主人公に」

一瞬イツセーの顔がチラついたが気にしない事にした。

「そう……なら………」

母さんが気味悪い顔をするので若干腰を引けた。俺、母さんに対して弱すぎだな…

「………何？」

「修行編よ」

「………は？」

「ほかにも入学編、追憶編、来訪者編 e t c …」

「待て待て、遂にラノベにも手伸ばし始めたのかよ」

「駒王科学園の劣等生」

「字数足りないからって無理やり「科」を足すなよ……てか駒王科って何よ!?!何すんのだよ!?!」

「黙りなさい。(物理的) 分解するわよ?」

「グロ……」

「それは置いといて……修行はマジよ。暇な時は山籠りが一番って相場が決まってるわ」

「決まってねーよ。世間を何だと思ってるんだ」

「お母さんも若い頃は修行修行で「おい、無視すんな」……そんな時、あの人に出会ったの……そう。あなたのお父さんよ」

「無理やり過去編ブチ込もうすんな。「そう……暑い夏の日のことだったわ……」え?マジで始まんのか?」

「成る程ね……首の付け根を指で摘んでクイってすれば落ちるのね」

私は樹の枝を人の首に見立てて毎日毎日チネリ続けていたわ……そんな時だった……

「Hey. Are you here alone? (やあ。いま一人?)」

肌の黒い大柄の人だったわ……

「Y…Yes……」

「Oh! Let's go to my hotel. (おお! ならホテルに行こう!)」

「(うわあ……完全にヤバイ奴だよ。行ったらおしまいだわ。ついて行ったら間違
いなく孕まされるわ……) No thank you.」

「……………How much? (いくらかな?)」

「こ、この黒人は私を何だと思っているのかしら? 流石に苛立ってきたので一発殴ろう
としたその時……」

「ちよ待てよ!」

私も黒人も勢いよく声の聞こえ方へと首を回すとそこには……

「You have big breast! Take off your clothes. (おっぱい大きいね! 服脱いでよ)」

更にヤバイ白人が来た……

「No! No! She is my girlfriend!」

黒人が白人に対抗しようとトンデモない嘘をついてくれた。そのまま二人の言い合
いは激化していった。するとその内……

「Ahh… I'm horny… (ああ…もう我慢できないぜ……)」

「me, too (僕もだよ)」

ん?なんか違和感あるぞ……?

「I wanna go to somewhere private with you. (君と何処かプライベートな場所に行きたいな)」

「It's a strange idea. I am also. (奇遇だね。僕もだよ)」

取り敢えず二人にはそつちの気が会ったようなので私を不快な気持ちなさせた罰として首をチネってから山を下りた。黒人白人が仲良しなのはいい事だね

「……懐かしいわね」

「オイ、巫山戯んな。父親出てこないし、気分悪くなるし損しただけじゃねーか」

「まあ、これは嘘よ。一週間寝ずに考えて今さつき頭に浮かんだ作り話よ」

「ただの思いつきじゃん」

「とにかく。『可愛い子には山籠りをさせよ』って事で…」

「そんな言葉無いんだよ。語呂悪いし」

「お黙り」

そう言うと母さんは俺の胸ぐらを掴んで…

「えいつ!」

投げた。………ねえ知ってる? 「えいつ」て掛け声で投げると大気圏越えるんだよ?
?

「え?ちよつ!マジで!?めつちや飛んでる!このまま本当に山籠り編なの!?ヤダ!嫌
じゃああああ!!!」

拝啓、名も知らぬ父へ…どうやらイツセーは街で幸せを、俺は山で苦しみを与えられる
ようです……

s i d e i ツセー

久しぶりに時人を殴ったら自分の拳を痛めました。どうもイツセーです。

夕麻ちゃんとのデートは初めてにしては上手く行ったかと思う。ただ困った事に映画見ようとゲーセンで遊ぼうとその大きな大きなおっぱいが揺れる事この上なし。歩いていても上下に揺れる事限りなしときた。全く素晴らしきやおっぱい。

最後は夕方の公園でいい雰囲気になってそのまま朝チユン決め込もうとした考えていた途端に問題が発生した。

うん。刺された。

シユピーン！ドスツ！ズブズブズツ！シユン！ブウーン！キンツ！ガキンツ！
シユパツ！バンバンツ！！ドドドドドツ！！パンパン！アンアンツ！ズブズブツ！ビュル
ルルルルツ！！プシャーだ。

え？これって後半朝チユンですよ？って思っただろ？違うんだよ。ぽっかり空いた穴から聴こえてきたんだよ！グロ過ぎる事にこの上なしだよ！

あれれ？刺さってるぞお？って思ってた夕麻ちゃんを見れば彼女はジエダイの騎士
ばりに手に光る棒を持っていた。取り敢えず聞いておこう。

「夕麻……ちゃん……どうして……蛍光灯……持ってるの？」

「ごめんなさいイツセーくん……でもあなたが……って蛍光灯じゃないから！」

夕麻ちゃんもつつこむんだ、かわよし。もう我慢できない！

「夕麻ちゃん……結婚しよう……俺、胸に穴空いてっけど……いいかな？」

「あ、あなた何でそんなに余裕なのよ!？」

「BLECHなら普通」

「違うのよ!!」

「いいじゃん。籍入れようぜ！」

「いやああああ!!」

「そんな嫌がる事ないじゃん。夕麻ちゃんが胸に穴空いてる男じゃないと好きになれないから開けたんでしょ？全く夕麻ちゃんはツンデレさんだな！」

いや、むしろヤンデレ!!

「無駄にポジティブ！いやああああ!!」

「てか夕麻ちゃん。黒い翼生えてるけどそれもイイね！ぺろぺろしていい？」

「いやああああ!! 帰りゆううう！」

そう言つて夕麻ちゃんは背を向け空へと消えて言った……嗚呼……いいお尻してるな

……

「あ、ヤバいかも………」

ああ……俺死ぬのかな……？嫌だなあ……何とかならないかなあ……転生とか今流行りだし……何とか……なんないなあ……

とうとう脚にも力が入らなくなり倒れこむとズボンのポケットから何かが落ちた。それは夕麻とのデート前にたまたま受け取った広告用紙だった。

「ああ……この紙が光って俺の命が助かるなんて展開………はないな」

そう言えば時人に主人公補正は無いつて言われたばかりだったな。とか考えてたら驚く事に広告用紙が光り始めてそこから何かが出てきた。

そして美しい紅い髪が俺の視界に映った後に俺の意識は途絶え……なかった。

「YEAHHHHHHHHHHHHHHH!!!」

どうしてか分からないが力が湧いてきた。

「ヒイツ!!!」

隣にいた紅い髪の主が俺の急な復活に驚き上げた悲鳴が聞こえた。

「美人さん。よくわかりませんが助かりました。このご恩は忘れません!!!」

「い、いや! 私まだ何もしてないわよ! まだ穴空いたままよ!」

「美人さん:俺には穴の一つや二つどうって事ありません! 皆等しく愛せます!」

「なんの話をしてるのかしらあなたは!?! 私はあなたの胸の穴の話をしているのよ!」

「ああコレですか? 大丈夫でしょ? 唾つけとけば治りませんか?」

こころ傷わりを一周クルンつとワセリンでも塗つとけば血は止まるだろう。

「穴は塞がらないのよ!」

「ササミ食べれば治るでしょう? 俺のお隣さんは母親に無数の風穴開けられましたけど

ササミ食べて寝たら次の日全快でしたよ?」

「心臓がないのよ!」

「ハツ食べるだけじゃだめですか?」

「逆に何故それで治ると思うのかしら!?!」

「いや、だからですね? お隣さんが……」

「そのお隣さんが可笑しいって言うのが分からないのかしら！」

ムツ失礼な……

「確かに俺のお隣さんは俺に対してあたりキツイですけどそれでも貴女に悪く言われるいわれはありません！」

ひゃあぁー!!俺めつちやくちやいい奴だろ!?時人が聞いたら泣くなコレは!

「いや、その事は謝るわ。だけどその穴は治らないから!平気でいられる意味がわからないわー!」

「日々幼馴染の理不尽な打撃のおかげで身体が丈夫なんですよね〜」

俺の体の高度をダイヤモンドまで高められるってな!まあ嘘だけど

「ああ、もう!!話にならないわね!取り敢えず貴方、コレを胸に近づけてみなさい!」

そう言われて紅髪の美人さんは俺にチェスの駒をいっばい渡して来た。

「何ですコレ?冷やかしですか?」

「いいから!死ぬわよ!」

「……………では一応……」

俺は美人さんの言う通りに穴の空いた胸の近くにチェスの駒を近づけるとあら不思議、駒が宙に浮いて胸の中に飛び込んで来たではありませんか!

「おおお!!」

おい時人！見てるか！俺は主人公補正があつたみたいだぞ！こんなファンシーな出来事17年間の生涯の中でなかったぜ！

渡された全ての駒が胸の中に吸い込まれた後にもさらに不思議な事に穴が塞がった。

「……………なんか服が真ん中だけ綺麗に破けて恥ずかしいですね」

「いやそこかしら!?!いや、それよりも8つの駒全部使ってしまったの!?!」

美人さんはとても驚いているようだが俺にはさっぱりピーマンわけワカメってヤツだ。

「何か問題があるなら吐き出しましょうか?少しだけ汚い音出るかも知れませんが……」

「いえ、貴方なら本当にやりそうだから結構よ……」

「そうですか。では俺はこれで失礼します」

「何処に行く気かしら?」

「そりやマイエンジェルタ麻ちゃんの翼をペろペろしに行くんですよ」

「貴方あの女に何をされた分かってるのかしら!?!」

美人さんはタ麻ちゃんよりたわわな果実……ゴホンゴホンッ!……おっぱいを揺らしてSっ気をかもし出ししながら尋ねてきた。

「もちろんですよ。でも彼女ですから。おっぱいを揉みしだくまでは彼女は諦めきれま

せん！」

「はあ……コレはとんでもない子を転生させてしまったようね……ダメよ！やめなさい」

美人さんは前半独り言の様にボソボソ言うので聞き取れなかったが後半は俺を止めようと前に立ち塞がって言い放つ。

「はあ、じゃあこうしましょう。夕麻ちゃんの一件が終わったら美人さんのおっぱいも揉みます。コレでどうです？」

俺的には良い妥協案だと思うが……

「馬鹿なのかしら？それは貴方が得をしてるだけでしょー！」

「ワガママですね。でも流石にこれ以上はダメですよ？本当にR—18行っちゃうんで」

！
流石に下無理だろ…俺が良くても世間が許してくれない。そこらへん常識あるんで

「このっ……童貞が……」

美人さんの口調が急に荒々しくなる。まさかこんな暴言が美人さんの口から出てくるとは思わなかったので俺も一瞬だけ怯んでしまった。つまり何が言いたいかと言うと……

「……………イイね」

「は？」

「ワンモア……………もう一度言ってくださああああいいいいいい!!!」

「ええ!？」

「出来れば下は脱いで上は着たままでキツイヤツをお願いしたいです!」

「え……………ええつ……………(この子、ここまで頭のおかしな子ではないと思っていたんだけど…)」
美人さんが考えている間にもイツセーはじわじわと詰め寄り催促する。

「さあさあ……………」

「ひいつ!きよ、今日のところはここまでにするわ!!ま、また呼び出すから!」

美人さんがそう言うとその足元におかしな紋様が現れてその中に吸い込まれて行く
「ま、待ってください!せめて名前だけでも教えて下さい!」

「い、いや!!」

ふ、普通に拒絶されたあああああああああ!!!!

俺がショックで固まっている内に美人さんは地面に完全に吸い込まれて消えてしまった。

消えてしまったものは仕方がないので俺は夕麻ちゃん探しへと駆け出した。

side???

「はあ……はあはあ……あ、危なかったわ……」

赤い紋様から物凄い形相で息を切らした女性、先ほどイツセーが劍幕に迫った女性が出てきた。

「部長!!如何したのですか!」

「わ、私はとんでもない子を眷属にしてしまった様だわ……まさかあんな子に『兵士』の駒8つも使うなんて……」

女性の言葉を聞いた瞬間、その場にいた3人は信じられないと言った顔をする。

「確かにそれはとんでもない（才能を持った）方の様ですね」

「ええ……とんでもない（性癖を持った）子よ……私がここまで追い詰められるなんて」
「で、その人は誰なんですか？」

ソファに座ってひたすらお菓子を食べて続けている幼女が一番気になっていた質問をする。

「この学園の2年生、兵藤一誠よ」

「……有名ですよね……あっちの方で」

幼女がボソッと呟く。

「分かっていたけどあそこまで（欲望に忠実）とは思わなかったわ……」

「部長は（一誠の才能を）見抜いていたのですね。流石ですわ」

仲間内でも勘違いが始まろうとしていた。

「?とにかく……眷属にしてみました以上は彼を放って置くわけにはいかないわ。明日呼び出すから準備しておきなさい」

「「はい！」」

「あーどうしよう。20玉くらい余裕で食べれそうだな。○亀製麺で小遣い使い切るなんて時人みたいだしなあ」

「ズズズズズズズズツツツツツツ!!!」

「ん?」

メニニューを見ながらブツブツ言っていると視界に俺に背を向けて座っている女の子が映った。その女の子の両サイドにはこれでもかかってくらい井が積んであった。

…すげー食ってんな、時人みたいだ。

将来あの女の子と結婚する旦那は大変だろうな……食費とか。などと考えていたがよくよく考えれば彼女が結婚する事は無さそうだ。だって…

目の前の女の子はシスターだから。

金髪の……………

おそらく「私は神に仕えているので一生独身!一生処女を貫きます!」とか清纯派アイドル紛いなセリフを言うんだろうな。時代は清楚系ビッチまで来ていると言うのになんと古風な……

「まあいいや。俺も食べよ」

取り敢えず基本的なあったかいうどんを5玉頼んだ。付け合わせはイカ天3つにかき揚げ2つ。店員さんは俺の前にあの女の子の接客をしたからかあまり驚いていなかった。

うどんの乗ったお盆を受け取った俺は折角なのであの女の子の隣に座ろうと思いついて行っただ。

美少女だといいな。うん美少女。絶対美少女だよ。原作で会ってる気がする。原作？まあいいか。取り敢えず美少女なのは間違いない。俺のダウジングがピンピン反応してやがるぜ。黒髪、紅髪、金髪……今夜は最高じゃああああい!!!!

そして俺は少し大きめに音を立てながら金髪シスターの隣に座り一言。

「オッスーオラー誠ー!」

「ズズズズズズズツツツツツツ!!!!!!」

しかし、俺になど目もくれず一心不乱にうどんを啜り続ける金髪シス………タ?

「……………何やってんのお前?」

「ん?ああイツセーか」

美少女以前の問題だった。金髪シスターの正体は金髪のカツラとシスター服を着たただの時人だった。

「うわあああああああああ!!!」

「うるせえええ!!!」

「痛い……」

なんか蹴られるの久し振りだな。

「店内ではお静かに」

「お前もだよ!」

「は?今回は完全に俺は被害者だろ。勘違いしてお前がナンパしてんだろ?ん?」

「うつ……そうだけど」

やばい時人のシスター姿が意外に似合っている……ダメだ!俺はノーマルだ!夕麻ちゃん一筋だ!

「はあ……お前今日デートだったんだろ?」

「あ、ああ……」

「その……なんだ。その服で行ったのか?」

時人は気まずそうに尋ねてくる。

「ん？この服変か？」

「いや、こんな格好してる俺が言うのも何だけど……その胸元の丸い破れはそう言うデザインなのか？」

「ああこれね。刺されたんだよ」

「何処がだよ。服破られただけだろ」

「いや、時人にも見せたかったよ。直径10センチ位は開いたね」

「それは刺されたって言わねーよ。貫かれたって言うんだよ」ズズズズズッ!!

「やめろ！汁飛ばすな！ちよっ！マジで！熱っ！思ったより熱い！」

「イツセーよ……貫かれたのと今の熱さ、どちらが辛い？」

「熱さだな。刺されたのは夕麻ちゃんだから許す。むしろウエルカム」

「(マゾにも限度があるな……取り敢えずあの賭博師の名ゼリフ言っとくか!!)」

「狂ってやがる！どいつもこいつも狂ってやがる!!」

「お前それ言いたかっただけだろ！」

いつもの様に俺はうどん50杯食って店を出た。恐らくあの店はもう行けない。出禁だ。いつもそうだ、食べ放題じゃ無いんだから儲けはしっかりあるだろ！全く……こんな上客は他にいないぞ……店員はどいつもこいつも狂ってやがる!! (2回目)

「時人あのさ……その格好どうした？」

「……修行にコスプレは付き物だろ」

まずは形からなんて言うしな。

「違うよ！てか修行ってなんだよ!?なに戦闘モノに移行しようとしてんだ!」

「ウルセエ!!お前がそんな事言っつて良いのか?腕腕ぐぞ?いいのか?追い追い支障が出るぞ?…いろいろヤバいぞ?」

「……………だとしても!シスターの格好は可笑しい!お前男だろ!」

「戦闘系シスターなんだよ。清楚系ビッチと同じだろ?」

「違う!!男の理想と脳筋シスターを混同するな!」

「戦闘系シスターなんて萌える要素しかないな!」

「あり得ない。お前は頭がおかしぜ?」

「よし。ならば暴行だ」

「どういう事……!へぶつ!!!」

「この後めちやくちや殴った……………」

「てか、アレだな……………ハラ減ったな…」

普段ならイツセーはつつこんでいるが今のイツセーは俺と同じ気持ちだ。

「そう言えばこの辺に美味しいラーメン屋…」

「そのネタはやめた方がいいじゃないか？」

ツツコミ欲しさにボケたらちやんと返してくれたので嬉しかったです まる

にしても空腹が半端ない……………仕方がない。

「……………久し振りにあそこ行きますか？」

我が竜巳家には唯一。唯・一！何度も行つて食い荒らしても出禁にならない幻の店がある。だから一ヶ月に一度はそこに行く。最近はずいぶんイツセーも付いてくる。何でも店の店長と気が合うらしい。

「それがいいな、うん。そうしよう」

イツセーも自身の空腹レベルを鑑みてあの焼き鳥屋が適当だと判断したようで領いたので俺たちは早速目的地へ行く事にした。

「ガラガラガラー」

「お前、引き戸だと絶対それ言うよな」

「らっしやい！……おお！久しぶりじゃねえか！そろそろ来る頃だと思つてたよ！」

店に入ると店長さんの威勢のいい声が吹きかかる。

「お久しぶりです…」

……ライザーさん」

ライザーさんは名前から分かる通り外人の方で、焼き鳥の味に感動を覚えて、遙々日本きて自分の店『串焼きライザー』を開いたらしい。一番人気は「フェニックス焼き」。俺も大好きで、毎回50本は食ってる。何処の鳥使ってるんだろ。

「珍しく神無かんなさんがいないじゃないか」

すっかり忘れていたが神無とは俺の母さんの名前だ。

「イツセーとうどん食べて帰る途中で寄ったんで」

「飯食ってから寄り道に飯食おうとするなんて時人くんの家ぐらいだぞ。あと君、なんでシスターの服着てんだ!? てかイツセーくん! 君そんな大食いじゃなかっただろ!!」

夜遅くなのにこの人元氣だな。

「俺も若干困惑してますよ。胸に風穴開けられてから身体の様子が可笑しくって……」

「風穴!! いや、死ぬだろ!!」

そりゃ驚くわな。

「いや、今は塞ってますよ。なんか爆乳人がくれたチエスの駒が身体の中に入った途端、まるで何も無かったように……残されたの丸く破れた服のみ」

「あゝ、やけに奇抜な格好してると思ったらそう言う事だったんだな……なるほど……そう

言う事か…」

「順応早いな。てか…」

「俺も初めて聞いたぞ、それ。てか爆乳人って何?」

「ん? そりゃあ『ぼくがかんがえたいさこのじんしゅ』だよ」

「ブフツ!!!」

イツセーが何故か子供っぽい口調で訳わからん事を言った後、店のカウンター席から何かを吹き出した様な音がしたので注目すれば…

「……アンタいたんだ」

「お、お。俺は週4ぐらいでこの店に来てるからな」

相槌をうった男性は名前こそ知らないがなかなか特徴的な容姿だ。年は恐らく30代程度、前髪金髪、残り黒髪のワイルド感溢れる渋めのオヤジだ。背も190近く会って何とも言えない威圧感、着流しと下駄を身につけた陽気な男だ。

「暇そうだな」

「ほつとけ! にいちちゃん、芋ロックと鳥3本!」

「はいよお!」

ライザーは注文を受け、調理場の方へ戻って行ったので、俺達も席に着くことにした。

「何で俺の隣なんだ?」

「いいだろ、見知った顔じゃないって事でも無いんだから」

「ライザーさん。取り敢えず鳥50本!!」

「よし!腕が鳴るぜ」

「相変わらずイかれた量を喰らうな」

おっさんがその数に顔を引きつらせていた。

「方や修行帰り、方や生き返りだからな。そりや腹も減る」

「だからその修行つてのはなんだよ……」

とイツセーが

「シスター服は関係ないだろ……」

とおっさんが

「まあ……これはおぼさんの趣味だな」

母さんの飛ばした修行先は母さんの友人の住んでいる森だった。おぼさんはいきなり俺に襲い掛かりシスター服にカツラ被せた後に過呼吸になって倒れたのでそのままにして帰路についたのだが、すっかり着替えるのを忘れていて、そこに空腹が襲い掛かる訳です。「いや、流石にこの格好は……だが空腹には勝てん!」てな流れで恥を忍んで丸〇製麺に駆け込んで、食事中にイツセーがナンパして来たって経緯です。

「おぼさんっ!」

「母さんの友人だ。前話しただろ？頭のイかれた人が居るって」

「あー…だからそんな格好してたんだな。やっと腑に落ちたぜ」

理解が早くて助かるよ…流石我が相棒。

「神無嬢も含めてお前らの身内少し、おかしいぜ？こんな俺が言うんだから間違いない」
「おっさんに言われずとも自覚症状はある。てか、母さんを「嬢」付けて呼ぶな。そんな歳でもないし、そんな仕事もしてない」

「へいへい」

「なんだ結婚できないからって他の家族を悲願でんの？」

「虚しいな」

「いや、イツセー。お前もその性格直さなかつたら同じ道を辿るぞ？今のお前は『おっさん予備軍』だぞぞ？」

「いや、こいつ……！」

うわあ……怒り方まで似てんな。本当にイツセーが心配になって来た。………よし！

俺は一つの決意をしてからライザーさんの持つて来た焼き鳥に食らいついた。
こうして夜は更けていくのであった……

5. 紅だあああああああー!!!

sideイツセー

どーも、イツセーだ。今日の朝はどうも調子が上がらない。気怠いつていうか…朝を受け付けて無いつて感じで…とにかく憂鬱。

今日もいつも通り時人の家に行き、あいつが起きるのを待つて昼に登校するんだろうな、と思つて竜巳家に行けば、一家揃つて留守でした。お婆さんは神出鬼没などころがあるので納得だが、時人が朝早くからいない事には驚きが隠せず、時人がいないからここで待つてゐるなんて事は勿論せず、俺は久しぶりの朝登校をしているところだ。

そう言えば昨夜の帰り時人が……

『いい事思いついた。イツセー、楽しみにしとけよ』

と親指を立てて血走つたウインクをしてきた。なにそれ、怖い。今日の留守はそれと関係あるのか。あいつの良い事つてのは大体ロクな事では無いので正直何が起こるか分からず恐ろしい。

「はあ……どうなることやら……だな」

「おはようす」

俺が軽い挨拶を添えて教室に入ると松田や元浜が俺を見て衝撃を受けていた。

「おい、どうした？」

「いや、何でいんの？」

「学生だから」

「あれ、珍しく時人を連れてない」

「彼は…遂には出席を放棄しました」

「あいつ、なんで進学したんだよ……」

全くだよ……

◇◇◇

その頃……

「女の人探してまーす。ご協力お願いしまーす。黒の長髪、身体つきはX型のメリハリ

体型です」

◇◇◇

side 木場

やあ。木場裕斗だよ。特技は剣の創造、趣味も剣の創造だあ！

side イツセー

無駄なモン入れちまったな。すまない。

またイツセーだ。学校での内容は割愛して放課後にさせてもらう。特に内容ないしな。松田と元浜と駄弁ってるだけだし……

まあストーリーリー上重要な会話と言えば夕麻ちゃんのを誰も覚えてなかった事かな。まあ其れもどうでも良い。俺が覚えて入ればそこに夕麻ちゃんはいんだ。

「よしー今日も丸〇製麺で5玉食って帰るぞ!!」

そう意気込んで校門を出ようとしたら……

「待ちなさい！」

「ああん!!？」

初対面の人だったたら舐められちゃ駄目だかな！先ずは相手に『こいつは敵に回せねえ！怖えよ！母ちゃん!!』って思わせなければならぬ……（竜巳家家訓 第32条 45項より）

「ひいつ!?!……さ、昨夜ぶりね。兵藤一誠君……」

振り向けば　そこにいたのは　爆乳人

「……………揉み犯しますよ！」

「何でっ!!？」

「字余りになったからでしょうが!!」

「だから何がっ!!？」

な、何なんだこの人！全然会話が進まないじゃないか！（えなり風）

「で何ですか？リアス・肉盛りー先輩」

「ば、馬鹿にしているのかしら……っ。グレモリーよ！リアス・グレモリー!!」

そう言っただわわな実りを見せつける……

……………リアス・乳盛りー

「貴方。今、更に馬鹿にしたでしょ……」

「そんな事ないです。チチモリー先輩」

「へえ？」

「あ……」

「殺すわ」

殺害宣言されたあああああああ!!

「ま、待つてください。グレモリー先輩!」

「今更じゃないかしら? スグに楽にして」

「違うんです! 殺すのは良いんです!」

「な、何を言っているのかしら?」

「俺はその爆乳で圧殺を希望します!!」

「何処まで欲望に忠実ね。貴方……いいわ、絞殺してあげる」

「いや、聞いてました!?! 乳殺しを希望したんですけど!?!」

「父殺しと掛けてるのかしら? 全然上手くないわよ? さあ! 早くお縄につきなさい!」

「いや、貴方もその言葉の使い方おかしいでしょ!! お縄違いやん! 死ぬヤツやん!!」

興奮し過ぎて若干関西弁入ってるのは許容してくれ、今はそれどころじゃ無い! リア

ス・チチモリー先輩のあの顔はマジで殺る顔だ。

「今、心の中でチチモリーって言ったわね？」

「……………てへっ！」

「キャラじゃねーんだよ！ドカスが!!」

いや、貴方もキャラ違うでしょーー!!

『滅殺の絞殺（ルイン・ストラングル）!!』

何かっこいい名前つけちゃってんの!?首絞める為に普通に歩みよってきてるじゃん!

「駒が勿体ないけど……………さようなら！」

「くっ……………!!」

ここまでか……………まさかこんな終わり方するなんて……………無類のおっぱい好きが裏目に
でたか……………無念……………

俺が死を受け止めグレモリー先輩の手によつてその首に縄が……………てかこの縄、跡が付
きにくい奴だ……………先輩、罪逃れしようとしてんだね?でも、窒素する迄締めたら流石に
跡残るよ?あ、ポケットトに着火マン入ってる……………死体は跡形もなく燃やすつてか…

「させないわ!!」

そこに突然、声と共にビュンツ!!と音を立てて何が先輩に向かって飛んでくる。…とな
るとそれに気づいた先輩も俺を始末する暇がなくなり急いで飛んだきた何かを回避す

る。

ズドンッ!と地面に刺さった何かはとても見覚えのあるアレだった……

「……………蛍光灯」

「いや違うから!!」

「……………」

何故だろう 裸クリーム 夕麻ちゃん

「墮天使…………いえ、痴女が何の用かしら?」

「痴女じゃなっ……………いとは言えないわね」

まあその姿ならそうですね。

「だけどこれは私の意思じゃないの!!」

「いや、その言い訳は無理があると思うわよ?」

「夕麻ちゃん、俺もそう思うぜ」

「……………イツセー君は嬉しくないの?」

「突然の上目遣い!!?ありがとうございます!!」

裸ホイップ(以下、「女体パフェ」という)な夕麻ちゃんの実り(以下、「おっぱい」と

いう)は実に貴いと思いました。

「無駄なものを入れないでもらえるかしら?しかも「以下、くという」の使っていないじゃ

ない」

良いツツコミするじゃねーか、乳森先輩。なら俺も……

「……………てか夕麻ちゃん！なんでこの前みたいに翼生やしてないの!?!ペロペロさせてくれる約束だったじゃん!」

「いや、無視しないで!?!」

!!
気にすんな今のグレモリー氏は空気だ。エアだ。超特殊調理食材だ。五連釘パンチ

「それがね。さつきから調子が悪いのか気張っても出ないの」

「へー体調で決まるんだな」

「決まるものなのね」

「決まるもんだ」

「決まるものよ」

「決まったな」

「決まったわ」

「文字稼ぎにきてるうううううう!!」

気づいたら 発狂してる グレモリー

といますか、

「そう言えば何で夕麻ちゃんはここに？」

「あ、いうの忘れてた！」

夕麻ちゃんは咳払いをした後俺の方へと身体を向けて少し背筋を伸ばした。もちろん裸ホイップ状態だ。

そして一言

「今日からこの学園の2年生として転入するわ。天野改め、竜巳夕麻よ。これからよろしくね！イツセー君!!」

「……………竜……………巳……………？」

『いい事思いついた。イツセー、楽しみにしとけよ』

「……………」

「またあいつかあああああああああ!!」

大和ハ〇ス……